

〔※1 中学校は、第1～3学年の授業の平均を示す。
 ※2 高等学校については、国際関係(語学を含む)の学科・コースを除く。なお、OCIは「オーラル・コミュニケーションI」を示す。〕

教師の話す英語はきわめて高い価値をもっている。生徒のインプットを増やすためにも、Classroom English や英語による Teacher Talk を増やしたい。また、シャドーイング(聞こえてくる発話をほぼ同時に口頭で再生する行為)等を取り入れ、インプットと発話を増やすことが望まれる。

イ トップダウンによる聞く力の養成

「聞くこと」は、単音という最小単位から、だんだんと文を積み上げていくボトムアップ的な過程と、様々な前提知識や手掛かりから聞き取れなかった音や語などを埋め合わせていくトップダウン的な過程の両側面から成り立つ活動であると考えられる。ボトムアップ的な指導としては、例えば、①弱音化(reduction)、②同化(assimilation)、③連音(liaison)[例、前項1(3)ア]、④省略(elision)などの音声変化についての知識を与えることなどが考えられる。

一方、トップダウン的な過程については、次の対話例により確認したい。

A: Hey, Jack, can you tell me what time it is?
 B: I just saw Professor Kline go into the classroom.
 A: Oh, no. I did it again.

この対話は、前提がなければ単に時間を聞いているものであるが、この場合は、㊦対話が友人同士のものであること、㊩AがKline先生の授業を受けていること、㊨Aが以前もKline先生の授業に遅刻したこと、以上の前提から最初の質問は、単に時間を

聞いているだけではなく、「まだ授業は始まっていないか。」という意味まで含んでいることを理解することが必要になる。

このように、トップダウンの過程では、意味的手掛かりや文法、語形、また、言語能力以外の側面の知識を与えたり、活用させたりすることが大切である。学習指導要領においても、このような考え方にに基づき、言語の使用場面や言語の機能が重要視されている(例、前項1(3)ウ①の例)。

ウ 「スキミング」、「スキヤニング」と推測能力を使う「聞く力」の育成

『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』では、「概要(話のあらすじなど、おおよその内容や全体的な流れ)をとらえる」ことの大切さが指摘されているが、これが「スキミング」(skimming)であり、また、「要点(聞き落としてはならない重要なポイント)をとらえる」ことが「スキヤニング」(scanning)に当たる。

大学入試センター試験リスニングテストでも、スキヤニングの力をみるために、次のような出題がなされた。

平成18年度大学入試センター試験 問題6

Question: Where did most students go for overseas study this year? (下線部は印刷部分。選択肢省略)
 W: How's the study abroad program going?
 M: Good. Lots of students went overseas this year.
 W: Where to?
 M: A few to the UK, some to New Zealand, and the majority to Australia. (施線は筆者)

また、話の内容がまとまっている場合は、たとえ本論の一部を聞き逃したとしても、導入部や結論部から全体の要旨が多分分かることが多い[例、①導入部(話のタイトルや概要を紹介)→②展開部(具体例や論拠を挙げての議論の展開)→③結論など(議論

のまとめや要点の繰り返し)]。また、「談話標識」(discourse marker)により、話題が転換したり(例, by the way), 逆接を表したり(例, but, however), 結論を導いたり(例, therefore) することが分かるので, ある程度内容の予測をすることができる。実際, 日常のコミュニケーションでは, 話の展開を予測しながら聞くことが多いことから, 「聞くこと」の指導においても推測能力を活用することが望ましい。

このような力をみる問題として, 大学入試センター試験にも次のような問題が出題されている。

平成18年度大学入試センター試験 問題7

M: Have you seen that new Korean movie everyone's talking about?
 W: No, I haven't.
 M: _____ (選択肢は省略)

3 「聞くこと」の指導実践例

聞く力を育成するための指導は, 授業でのウォームアップや前時の復習, 本文の説明, まとめ段階のほか, 自宅学習などあらゆる機会をとらえて行うことが望ましい。このため, 「話す」, 「読む」, 「書く」といった他の領域と有機的に関連付けた言語活動を設定することが大切である。

ここでは, シャドーイングの手法を用いることによりインプットの量を増やすことをねらった実践例を紹介する。

「聞くこと」を重視した英語Ⅰの指導の工夫

① 英語のリズムに楽しさ, 面白さを感じるリズム練習や歌の工夫(ゲームやTPRなど)
 ② 心理的抵抗を感じさせない言語材料の工夫
 ③ 段階的に成就感を味わわせる工夫

- ④ 英語の音声変化の特徴を理解させる工夫
- ⑤ 音声と意味とを結び付けるための工夫
- ⑥ 英語を聞くことに自信をもたせる工夫
- ⑦ 聞いて得た情報や自分の考えについて, 話し合ったり, 意見の交換をさせたりする工夫
- ⑧ 聞いて得た情報や自分の考えについて, 整理して書かせる工夫
- ⑨ **学習形態(ペア, グループ, 一斉), 学習環境(LL教室)の工夫**

【③, ④, ⑤, ⑨の工夫として段階的なシャドーイングを導入】
シャドーイングの展開

Step 1: テキストを見ずに, シャドーイングする素材を聞き, 話の内容, 話し方の特徴などを大まかにつかむ。

↓

Step 2: テキストを見ずに, 音声を聞きながらぶつぶつとつぶやくように発音させる。その際, 音声内容に注意をさせる。

↓

Step 3: 教材を見ながら, 流れる音声とほぼ同時に全部口に出して音読をさせる。その際, 教材の意味をしっかりと確認させる。

↓

Step 4: 前時の復習として, 文と文の間にポーズを入れて録音したテープの後について読ませる。

↓

Step 5: ペアを組み, 一人は読み手となり, もう一人は読み手のすぐ後にシャドーイングをする。その後, 役割を交代する。

(加治木高等学校 森園博昭 教諭の実践を基に作成)

本実践(英語Ⅰ)では, ALTの活用やシャドーイングで用いる音声の速度調整, ポーズの挿入, 学習形態などの工夫を加えた。授業後の調査によると, 「聞くこと」に対する生徒の戸惑いは軽減され, 関心・意欲の高まりが見られるとともに, 音声上の特徴の認知力や語の認識力が向上した。

今後は, 音声指導を重視しつつ, 英語の「聞く力」の育成を目指した学習指導の工夫改善に努めていただきたい。

[引用・参考文献]

○千葉大学教育学部研究紀要 第53号 2005年
 ○小寺茂明他著『英語教育の基礎知識』大修館 2005年
 ○川越いつえ「日本人はなぜ英語が聞けないのか?」
 『英語教育』10月号 2000年
 ○金谷憲著『英語授業改善のための処方箋』大修館 2002年
 ○ECOLA 英語科教育実践講座 第1巻 ニチブン 1992年
 (教科教育研修課)